

<特集「京都府立医科大学の看護教育開始から120年を経て～そのはじまりをみつめる～」>

京都府立医科大学における産婆教育の黎明期 明治時代の京都における産婆教育の変遷を踏まえて

松岡 知子, 岩脇 陽子

京都府立医科大学大学院保健看護研究科保健看護専攻*
京都府立医科大学医学部看護学科看護学講座

The Dawn of the Midwife Education in Kyoto Prefectural University of Medicine Be Based on Changes of the Midwife Education in Kyoto of Meiji Period

Tomoko Matsuoka and Yoko Iwawaki

*Graduate School of Nursing and Health Care Science, Master of Nursing for Health Care Science,
Kyoto Prefectural University of Medicine
Kyoto Prefectural University of Medicine School of Nursing*

抄 録

京都府は東京遷都に伴う京都復興策の1つとして医療の近代化を進めた。産婆教育もその追い風を受け、我が国では最も早い1874年(明治7年)の医制発布翌年に京都産婆会における産婆教育が開始された。それ以前の1873年(明治6年)に本学の前身である京都療病院で京都における初めての解剖が行われたが産婆にも見学が許可されたとあり、本学では産婆教育の開始前からその土壌が備わっていたと思われる。また、京都産婆会に対しては、施設見学の受け入れや、一時期衰退しかけた時期には、本学の門下生医師が協力をしていた。

全国的な産婆規則が制定されたのは1899年(明治32年)であるが、京都府では全国よりも11年早い1888年(明治21年)に産婆試験を開始した。本学における産婆教育の開始は、その翌年の1889年(明治22年)である。この年は医学学校経費の地方税による支弁が禁じられた年であり、このような時期に産婆の養成を始めたのは、卓見であったと言わなければならないであろう。

キーワード：京都府立医科大学, 明治時代, 産婆教育。

Abstract

The city of Kyoto proceeded with the modernization of health care as a part of its restoration program accompanying relocation of the capital to Tokyo. The education of midwives was also propelled forward by this modernization, and the training of midwives for the first time in Japan began at the Kyoto Midwives Association in the year following promulgation of the health care system in 1874. Autopsies were also performed for the first time in Kyoto in the previous year of 1873 at the Kyoto Rehabilitation Hospital,

the predecessor of this hospital, and midwives were allowed to observe those procedures. Thus, this university is considered to have laid the foundation for midwife education before it actually began. In addition, this university accepted requests for observation tours of its facilities from the Kyoto Midwives Association, and provided cooperation including revitalization activities by students and physicians at times when there was a temporary decline.

Although national regulations pertaining to midwives were enacted in 1899, Kyoto began midwife testing 11 years earlier in 1888. Commencement of midwife education at our university began in the following year of 1889. This year marked the start of prohibition of regional taxes from being allocated to support medical school costs, making the decision to begin training of midwives at this time extremely farsighted.

Key Words: Kyoto Prefectural University of Medicine, Meiji Period, Midwife Education.

はじめに

1874年(明治7年)文部省より医制76条が東京、京都、大阪の3府に発布され、その中に産婆についての資格、職分が第50条から第52条に規定された。新たに免状を申請する者に対しては、「40歳以上で、婦人小児の解剖生理の大意に通じ、産科医より出す実験証書(産科医の前で平産10人、難産2人を取扱いたるもの)を所持する者を検し免状を与える」とした。免状がなければ助産婦業務が禁じられ、医師と産婆(助産師)の業務がはっきりと区別された¹⁾。

京都では、医制発布翌年の1875年(明治8年)に京都産婆会(後の平安産婆学校)において産婆教育が始まった。これは、1876年(明治9年)東京府病院産婆教授所・大阪医学校での産婆教育の開始よりも1年早く、我が国の産婆(助産師)教育の嚆矢である²⁾。

その後、京都では、1889年(明治22年)に京都府医学校附属産婆教習所、1897年(明治30年)に同志社病院内京都看病婦学校附属産婆課程(後の京都看病婦学校京都産婆学校)、1902年(明治35年)に京都帝国大学医科大学附属医院産婆講習科、1909年(明治42年)に私立桃山産婆学校が開校され³⁾、明治時代に京都には産婆学校は5校あった。

明治時代において京都では産婆の教育が盛んに行われていた。その中でも本学での産婆養成の開始は2番目に早く、後の大学附属産婆教習所の中では最も早い開校である⁴⁾。

本学の助産師教育の変遷

京都府立医科大学での産婆養成は1889年(明治22年)に京都府医学校附属産婆教習所が設置された時に始まる。その後、1901年(明治34年)に京都府医学校附属産婆看護婦教習所、1903年(明治36年)に京都府立医学専門学校附属産婆看護婦教習所、1924年(大正13年)京都府立医科大学附属産婆看護婦教習所、1946年(昭和21年)に京都府立医科大学附属産婆看護婦教習所・厚生女学部助産婦科、1948年(昭和23年)に京都府立医科大学附属厚生女学部助産婦科と発展した⁵⁾。

1948年(昭和23年)に保健婦助産婦看護婦法が公布され、この法律によって、保健婦・助産婦・看護婦のいずれについても国家試験及び国家登録の制度が採用された。また看護婦になるためには高等学校終了後3年間の教育を受けなければならないこと、そして保健婦・助産婦になるためにはさらにその後半年以上の教育期間を必要とすることが定められた。この改正を受け、本学は、看護学院として文部省の認可を受け、厚生女学部は1949年(昭和24年)3月をもって、生徒の募集を停止し、助産婦科は1953年(昭和28年)3月に廃止となった。これを惜しむ当時の厚生女学部助産婦科長で産婦人科学教室教授山田一夫は再三京都府に対して存続を陳情したが、容れられなかった。その理由の一つには新制度の産婆(助産師)を養成するには分娩数が少なかったこともあるが、京都府の財政事情もあり、また助産婦は大学の産婦

人科が養成するという考えを学校や附属病院が養成するという考えに切り替えることが容易でなかったこと、養成の中心となっていた産婦人科教授の停年退職が迫りその後の産婆(助産師)養成の方針が必ずしも明確でなかったことなど、様々の悪条件が重なっていた⁶⁾。

その後、助産師不足と高齢化が全国的にも京都府立医科大学附属病院においても深刻な問題になり、内外からの助産師教育再開への要請があった⁷⁾。1979年(昭和54年)に京都府立医科大学は附属病院と基礎・臨床医学舎を全面的に整備する大学整備構想が決定され、周産期診療部門が開設されることとなった。それに伴い新しい高度な教育を受けた助産師養成が急務となり、教育整備の一環として1983年(昭和58年)に京都府立医科大学附属看護専門学校助産学科での助産婦教育が30年の空白を経て再開した⁸⁾。その後、1996年(平成8年)に京都府立医科大学医療技術短期大学部専攻科助産学専攻、2005年(平成17年)からは京都府立医科大学医学部看護学科へと発展した。

1889年(明治22年)に京都府医学校附属産婆教習所が開設され、本学における助産師教育が開始されてから、今年2009年(平成21年)は、120年目の年を迎えた。

医制発布までの京都における 助産師(産婆)教育

産婆という名称は、江戸時代後半より出現し、職業として広まった。当時は、産婆の教育や啓蒙のため本邦最初の産婆教本である平野重誠(1833年・天保3年)の「坐婆必研」等の文献はあったが、系統的な産婆(助産師)教育は医制発布まではされておらず、個人的な経験により行われていた。

京都では1869年(明治2年)に全国に先駆けて欧化急進派で教育熱心な横村正直知事が女紅場を作り女子教育に力を注いだ⁹⁾。1872年(明治5年)、今まで特権階級のものであった教育を、広く国民のものとするために「学制」が敷かれた。これにより、身分に関係なく、女子にも教育の道が開かれ、女子も文字が読める

ようになり産婆(助産師)教育開始の下地が整うようになった¹⁰⁾。

京都療病院において1873年(明治6年)に明治維新後の京都における初めての解剖が行われたが産婆(助産師)にも見学が許可されたとある。本学では産婆教育の開始前からその土壌が備わっていたと思われる¹¹⁾¹²⁾。

医制発布後、本学産婆教育開始までの 京都における産婆(助産師)教育

京都では、先に述べたとおり、医制発布翌年の1875年(明治8年)に京都産婆会において産婆教育を開始していた¹³⁾。本学での産婆教育開始までの京都における産婆教育の変遷や本学との関係を述べる。

1. 京都産婆会の創始期 1875年(明治8年)～1883年(明治16年)頃

初代の京都府知事である長谷信篤は、東京遷都に伴う京都復興策の1つとして医療の近代化を進めた。その一環として、「産婆ノ職務ト国家衛生上ニ重大ナル関係アル事ヲ知り」、その改善が急務であるとした。1874年(明治7年)に産科医小笠原孟政に「上京区産婆取締」を命じ、1875年(明治8年)には、京都府の医務係であった明石博高や高名な産科医を集めて京都産婆会を組織した。会の目的は、近代的な産婆の教育であり、市内各小学校に於いて産婆講習会が毎月1回行われた。この講習は、「之レ抑モ本校ノ淵源ニシテ我が邦ニ於ケル産婆講習ノ嚆矢ナリトス」とされていた。講師は、当時の「産科ノ芳名喧シカリシ」小笠原孟政、賀川景之助らであった。何れも伝統女科医である小笠原家、賀川家の後継者であった(資料1)。

小笠原孟政は1878年(明治11年)「朱氏産婆論可否の御下問二付上申」で、「婦人胎孕ヨリ分娩ニ至テハ専ラ産醫産婆ノ任ニシテ其ノ生育ノ安否ハ全ク治療手術ノ得失ニ係ル」と、妊婦の健康管理に果たす産科医と産婆の役割の重要性を述べている。しかし、当時の産科医や産婆は古い医学の知識から脱却できていない為、新しい教育が必要であると述べ、朱氏(シュルツ)産婆論を講本としたい旨を上申している。ま

<p>平安産婆学校沿革史</p> <p>第一期 京都産婆講習会時代</p> <p>明治ノ初年京都府知事トシテ令名墮レナカリ シ新進氣鋭ノ長谷信篤氏ハ夙ニ國家衛生ニ心 ヲ留メ療病院ノ創立ニ多大ノ力ヲ盡シ更ニ産 婆ノ職務ヲ國家衛生上ニ重ナル關係アルコ トヲ知り之レヲ改善スルノ其メタ急務ナルヲ覺 リ明治七年七月九日産科醫小笠原孟政氏ニ上 京區産婆取締ヲ命ジ(下京ハ佐々木道逸氏)尋 テ明治八年月不詳發未時行氏明石壻高氏神部</p>	<p>某氏等ノ屬僚ニヒヨク會メテ京都産婆講習會ヲ組織 シ上京區役所衛生係ヲシテ之レヲ監督ノ任ニ 當ラシメ講師トシテ當時産科ヲ以テ必ク名喧シ カリシ小笠原孟政氏上山武邦氏賀川景之助氏 等ノ諸氏ヲ舉ゲ市内各小學校ニ於テ順次毎月 一回産婆學ノ講筈ヲ開始セリ之レ抑モ本校ノ 淵源ニシテ加之我カ邦ニ於ケル産婆講習ノ矯 矢ナリトス</p> <p>明治十年三月十七日上京産婆教育方ヲ小笠原孟 政氏ニ命ゼラル</p>
---	--

資料1 平安産婆学校沿革史

た、「産婆会ノ講本ニ就キ府知事ノ下問ニ封シ答弁書」では、器械や医薬が進歩しているにも関わらず、産婆がその使用を恐れ、それを産婦に伝えるので産婦もその使用を恐れることがあるとし、産婆教育のための器械薬品を具備する近代的な病院として本学の前身である療病院の見学を依頼している。

京都産婆会における産婆教育は、官主導で始まり、優秀な医師の指導で組織化された。また、西洋の近代的な医学書を教科書にしたり施設見学の導入を試みるなど産婆教育の向上が図られていた。本学は、施設見学の機会を提供していた。

2. 「京都産婆会」の衰退と「京都産婆講習会」としての再興期 1884年(明治17年)～1886年(明治19年)頃

「京都産婆会」は、1884年(明治17年)より衰退し始め、1886年(明治19年)には閉会の危機に瀕した。これに対し、当時の京都府衛生課長清永公敬は「深ク之ヲ嘆キ」、「公共事業ニ盡瘁スル人」である京都化芥所々長の廣野孫三

郎を發起人とし、河田蘭太郎、大島甲子郎等を講師にし「京都産婆講習会」と改称して再興させた。河田は、京都府医学校外人講師シヨイベの門下生であり、当時、世界的にも産婆教育が求められていることを知る熱意ある産科医師であり、後に「京都私立産婆看病婦養成所」の初代校長に就任した。

「京都産婆講習会規則」第二条では「産婆営業ヲ為スモノハ本会ニ加入スルヲ要ス」と記されており、産婆教育は営業をしている産婆を対象に行われ当時108名が受講した。講義は、月に1回土曜日午後1～4時に、上京区役所又は下京区十八区小学校において行われた。各小学校には2～5名の世話係が置かれ、庶務を担当した。教育内容は、「學術ノ講義及實地ノ談話」であり、講義には朱(シュルツェ)氏産婆論が用いられた。営業している産婆を対象としている為、講義日が「戌ノ日」の場合は順延された。廣野は、産婆教育に関する諸費用を負担するとともに、教科書として「分娩前後より懐妊中の養生法」が記されている「産婆心得」150冊を寄

付した。これは、受講生の産婆に一冊ずつ貸与された。

京都における産婆教育は、1886年（明治19年）には衰退の危機に瀕したが、官主導により、有力な援助者を得て再興し、本学の門下生であった国際的な視野を持つ産婆教育に熱意のある産科医師の指導により発展した。

3. 産婆試験と「京都産婆養成所」としての発展期 1887年（明治20年）～1906年（明治39年）頃

1888年（明治21年）、京都府令第41号により産婆の営業は、内務省又は京都府の試験に合格しなければできない事が定められた。これに対し京都産婆講習会は、月に1回行っていた講習会では産婆試験合格は困難である為、京都産婆養成所と名称を変え、月に12回の講義を行う事とした。当時の産婆達は80歳の生徒も含め全てが「大ニ奮發シ十二回の講筵ニテ尚飽キ足ラズ教師ノ私宅ヲ訪問シ質義スルモノモアリ」とある様に熱心に学んだ。

京都産婆養成所規定によると、その目的は、産婆学及び実地、妊婦看護学を教授し産婆を養成する事としている。受講資格は、18歳以上の「体格強壯品行端正ナル」就学中に家事をしなくてもよい女性であった。入所試験も実施された。生徒は内務省免許受験資格を取得する正則生と京都府の免許受験資格を取得する変則生の2種類あった。修業期間は1年で、2学期制であった。教育内容は1学期は、解剖学・生理学のうち産婆に必要な内容、2学期は妊産婦の診断法、産婆に必要な実地取扱い法、手術式の演習、看病学の大意であった。講義は19～22時に行われた。全学科修了後、筆記と口述による試験が行われ、合格者には内務省もしくは京都府の試験の受験資格が与えられた。1888年（明治21年）4月の京都産婆養成所出身産婆試験登第者は70名であった。

1890年（明治23年）、京都産婆研究会が設立した。この会の目的は「同志ノ産婆相團結シテ学術ヲ研究シ且ツ営業上ノ便益ヲ謀リリ加フルニ舊來ノ弊害ヲ矯正スルニアリ」である。会員は、京都産婆養成所卒業生と賛成者であり、例

会は毎月2回（1日、15日）開催された。1892年（明治25年）には、子宮癌で死亡した患者の死体解剖の見学を教育に取り入れているが、これは京都産婆養成所生徒のみならず京都産婆研究会会員も対象としていた。京都産婆研究会による卒後教育は、京都産婆養成所による基礎教育と提携し、教育レベルの維持・向上が図られた。

開校以来、京都産婆会の産婆教育は官主導であり、熱心な医師によって教育レベルが維持・向上されていたが、産婆自身は受け身的であり1886年（明治19年）には衰退の危機に至った。京都では、1888年（明治21年）に資格試験を開始した。産婆はこれに応えるべく熱意を示した。又、教育内容も質・量共に充実し、多くの合格者を輩出した。さらに卒後教育も組織化し、解剖見学を取り入れるなど、教育の充実を図った。

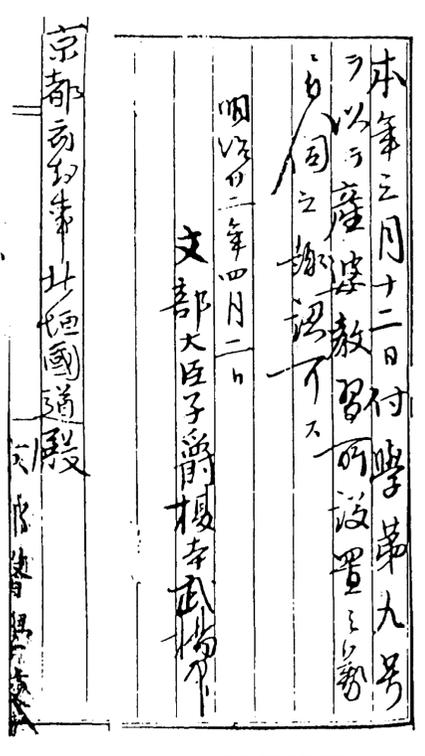
1892年（明治25年）頃までは京都産婆養成所に対する京都府の支援は大きかったが、徐々に少なくなり、独立採算の産婆養成所となり1906年（明治39年）には、組織を改めて私立平安産婆学校と改称した。

京都府立医科大学における産婆（助産師）教育のはじまり

本校で産婆（助産師）養成が行われるようになったのは京都府で産婆試験が開始された翌年の1889年（明治22年）である。この年は医学校経費の地方税による支弁が禁じられた年であり、このような時期に療病院・医学校が産婆の養成を始めたのは、卓見であったと言わなければならないであろう¹⁴⁾。

京都府医学校長兼療病院長猪子止文之助は産婆教習所設置のために努力し、1889年（明治22年）3月12日付で文部大臣榎本武揚は京都府知事北垣国道に対して、産婆教習所設置認可を与えた。これを受けて京都府は教習所設置を告示し、また教習所規則を定め、4月16日開所の運びとなった（資料2）。

教習所に入所できる者は、高等小学校卒業またはこれと同等の学力を有する満20歳以上の



資料2 産婆教習所設置認可

健康で品行端正な女子となっている。教習料は1か月50銭、教習年限は1年で、これを2期に分け、1週およそ24時間の教育を行った。講義

と実習が行われ、講義は第1期には予備論（人体の構造）と順産論（正規妊娠、正規分娩、正規産褥）から成り、第2期には異常産論（分娩異常、妊娠異常、産褥異常）と産婆職務から成っていた。講義は主として医学校の産婦人科教諭が受け持ち、開設当初の担当者は足立健三郎、田村克巳、星野元彦、栗生光謙であった。実習については、第1期では産婦20人以上、第2期では30人以上を経験することと定められていた¹⁵⁾。本学の産婆（助産師）教育は、明治32年に出された産婆規則による産婆試験科目と比較してもこれを上回る内容の教育を行っていたと思われる。本学では開校時より先駆的な産婆教育の方針をとっていたと考えられる¹⁶⁾。

第1期卒業生は、江戸末期の天保三年生まれで当時57歳の女性を最年長とし、明治元年生まれで22歳の女性を最年少とする10人であったが、この第1期卒業生は産婆教習所の創設と同時に卒業している¹⁷⁾。これはおそらくその以前から療病院の中で実質的に教育が行われており、それが産婆教習所という外形を整えたのであろう¹⁸⁾。京都産婆会での産婆教育同様すでに産婆業務を経験していたものも含まれていたと思われる（資料3）。

入学の頻度は、1894年（明治27年）までは年1回の入学であったが、その翌年からは春秋

卒業生 番号	姓	名	年	齢
一	田尻	ハチ	天保十四年三月生	
二	森	キク	嘉永二年十一月生	
三	井上	シヅ	萬延元年七月生	
四	寺村	スエ	慶應二年一月生	
五	吉田	ヌイ	安政五年六月生	
六	山中	カノ	天保三年十一月生	
七	本林	タツ	文久三年五月生	
八	林	ウツ	弘化二年二月生	
九	津田	チヅ	天保十三年三月生	
一〇	大塚	スエ	明治元年十月生	

明治三十二年四月

資料3 産婆教習所第1回卒業生名簿

2回の入学となり、この制度は59年後に本校での助産師教育が中断されるまで続くことになる。

1896年(明治29年)産婆教習所規則の一部が改正され、学科課程は前学期に解剖学及び生理学の大意と産婆学(妊娠分娩、産褥平常経過、その取扱法)、後学期に産婆学(妊娠分娩産褥異常経過及びその際産婆のなすべき務)、産婆模型演習(妊産婦の診断法及び産婆に必要な手術)、産婆術実習(療病院外来及び入院患者について実習)となり¹⁹⁾教育はさらに充実したものとなった。

結 わ り に

1874年(明治7年)の医制で産婆の資格につ

いて規定されてはいたが、実際は空文で各地方の取締規則にゆだねられていた。全国的な産婆規則が制定されたのは1899年(明治32年)であった。京都では、1875年(明治8年)に京都産婆会における産婆教育が開始され、全国よりも11年早い1888年(明治21年)に産婆試験を行っている。明治期の京都における産婆(助産師)教育は、京都府が東京遷都に伴う京都復興策の1つとして医療の近代化を進めたという追い風を受け、先駆的であった。

1889年(明治22年)に開始された本学の産婆(助産師)教育は、その後に出される産婆規則で規定される教育内容以上であり、充実した教育内容であった。

文 献

- 1) 武谷雄二他編. 基礎助産学1 助産学概論. 東京:医学書院, 2001; 42.
- 2) 北村笑子, 西村(松岡)知子. 京都における助産婦(産婆)教育のはじまり—助産師教育史に関する若干の史料を中心に—. 看護教育 1999; 30: 150.
- 3) 宮中文字, 松岡知子. 京都府立医科大学における助産婦教育の変遷. 看護のあゆみ. 2001; 38.
- 4) 宮中文字. 京都府立医科大学における助産師教育の変遷について—我が国の助産師教育の変遷を踏まえて—. 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要 2003; 9: 前掲書, 191.
- 5) 京都府立医科大学附属看護専門学校創立100周年実行委員会. 京都府立医科大学附属看護専門学校百年のあゆみ. 56-57.
- 6) 前掲書5). 34-41.
- 7) 前掲書4). 197-198.
- 8) 前掲書5). 53-55.
- 9) 前掲書4). 190.
- 10) 青木康子他編. 助産学体系1 助産学概論. 東京:医学書院, 2006; 26.
- 11) 滝下幸栄, 岩脇陽子, 新村 拓. 京都府立医科大学における看護教育のはじまりについて(1). 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要 1995; 4: 65-72.
- 12) 滝下幸栄, 岩脇陽子, 新村 拓. 京都府立医科大学における看護教育のはじまりについて(2). 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要 1997; 7: 83-88.
- 13) 平安産婆学校. 沿革史.
- 14) 前掲書5). 14-15.
- 15) 前掲書5). 15.
- 16) 前掲書4). 192.
- 17) 前掲書4). 191.
- 18) 前掲書5). 14.
- 19) 前掲書5). 14-15.

著者プロフィール



松岡 知子 Tomoko Matsuoka

所属・職：

- 略 歴：1981年3月 京都府立医科大学附属看護専門学校卒業
 1982年3月 三重県立公衆衛生学院助産学科卒業
 1987年3月 国立公衆衛生院専攻課程看護コース修了（1年）
 2000年9月 佛教大学社会学部社会福祉学科（通信教育部）卒業
 2003年3月 立命館大学大学院社会学研究科応用社会学専攻
 博士前期課程（社会人）修了 修士（社会学）
 1982年4月 京都府立医科大学附属病院看護部周産期診療部看護婦
 1987年4月 京都府立医科大学附属看護専門学校専任教員
 1996年4月 京都府立医科大学医療技術短期大学部講師
 2005年4月 京都府立医科大学医学部看護学科専任講師

専門分野：助産学，母性看護学

- 主な業績：1. 松岡知子. 骨盤位矯正法（自己回転促進法）の保健指導のコツ. 看護のコツと落とし穴. 東京：中山出版，2000；33.
2. 松岡知子. 妊婦・褥婦のケアプラン. 周産期エキスパートナーシング. 東京：南光堂，2003；200-235.
3. 松岡知子，櫻谷真理子. 保育所における一時保育を利用した母親の意識調査. 立命館人間科学研究 2004；7：13-24.
4. 松岡知子，宮中文子，五十嵐稔子. 助産師教育における分娩介助実習の検討—短期大学専攻課程の7年間の検討から—. 京都府立医科大学看護学科紀要 2004；13：85-94.
5. 松岡知子. 妊婦の看護と支援—就業妊婦—. 周産期医学，東京医学社 2006；36：607-611.
6. 松岡知子，岩脇陽子，滝下幸栄. 京都における産婆教育の起源—京都産婆会の創始期に焦点を当てて—. 第27回日本看護科学学会学術集会. 東京：2007.
7. 松岡知子，滝下幸栄，岩脇陽子，秋山寛子. 京都における産婆教育の起源（第2報）. 第28回日本看護科学学会学術集会. 福岡：2008.
8. 松岡知子，滝下幸栄，岩脇陽子. 京都における産婆教育の起源（第3報）「京都産婆養成所時代」. 第29回日本看護科学学会学術集会. 千葉市：2009.